

# 次の学校を創るための 学校教育デザイン

高校現場は今、大きな変化の真ただちにある。大学入試改革、次期学習指導要領、そして生徒たちが生きる社会——すべてが密接につながり、さらに大きな変化が生まれつつあるこの時を、次代の要請に応える学校改革のチャンスとすることが求められている。

そこで弊誌では、各学校が積み重ねてきた成果、伝統を土台にしながら、

自ら未来を切り拓き、家庭や地域、世界の期待に沿える人材を育てる次の学校づくりの視点を

「学校教育デザイン」と名づけ、今後4号にわたって、その具体を読者の先生方とともに考えていく。

## 自校を再構築する

### 「学校教育デザイン」

AI（人工知能）の発達やIoT（\*1）の実現などの技術革新の影響により、今後10～20年間で職業のあり方が変化することが予測されるなど（図1）、以前は想像もしなかった姿に社会が変わろうとしている。そして、今後も、予測困難な変化を社会は遂げていくと考えられる。

そのような社会を生きる生徒が未来を切り拓いていけるよう、学校教育において育成を目指す資質・能力が、次期学習指導要領において明確

化されることになった。それはすなわち、「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」だ（図2）。

それらの資質・能力は、これまでの学校教育で育成してきた力とは異なる、全く新しい力というものではない。ただ、これまでは「何を学ぶか」という、学習内容（コンテンツ）に注目がいきがちであったが、これからは、それを学ぶことで「何ができるようになるか」、すなわち、資質・能力（コンピテンシー）の育成とい

う視点で、教育活動を営んでいく必要がある。

そして、資質・能力を育成するために必要なのが、「主体的・対話的で深い学び」の実現だ。その「主体的・対話的で深い学び」も全く新しい学びではなく、これまで多くの学校・教師がその実現のために様々な工夫をしてきた。つまり、これらの学校に求められるのは、これまで積み上げてきた取り組みとその成果を振り返りながら、変化する社会の文脈の中で、育成すべき資質・能力やそれを育む学び・指導を捉え直したり、整理したりすることである。

## 図1 今後の職業のあり方に関する予測

2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就くだろう。

—— ニューヨーク市立大学大学院センター教授キャシー・デビッドソン氏

今後10年～20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い。

—— オックスフォード大学准教授マイケル・オズボーン氏

2045年には人工知能が人類を越える『シンギュラリティ』に到達する。

—— アメリカ人発明家レイ・カーツワイル氏

\*1 Internet of Things の略。スマートフォンやパソコンだけでなく、様々な物に通信機能を持たせ、インターネットに接続したり、相互に通信したりして、自動制御や情報収集などを行うこと。

ただ、教育活動の捉え直しは、ゼロベースからではないとは言え、一朝一夕でできることではない。高校教育は、2020年度に「大学入学共通テスト（仮称）」の実施、22年度に新学習指導要領の実施と、大きな変化が続く（P.6図3）。そのため、「大学入学共通テスト（仮称）」を受験する生徒が入学する18年度までのこの1年間は、自校はどのような資質・能力を生徒に育み、どのような教育課程や指導計画を策定して、どのように授業や評価方法を改善するのかを学校全体で考えられる重要な機会と言える。

そこで弊誌では、学校教育目標から教育課程・指導計画の策定、授業改善・評価方法の確立とその実践・検証までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現されるものを「学校教育デザイン」と名づけ、その実現のポイントを、今号から4号にわたって展開していく（P.7図4）。

## 答申と現場の声を基に描く5つのデザインプロセス

では、「学校教育デザイン」はど

のように進めていけばよいのだろうか。16年12月に中央教育審議会から公表された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下、答申）と現場の高校教師へのヒアリングを基に、弊誌では「学校教育デザイン」を描くプロセスを、次の5つのステップに整理した。

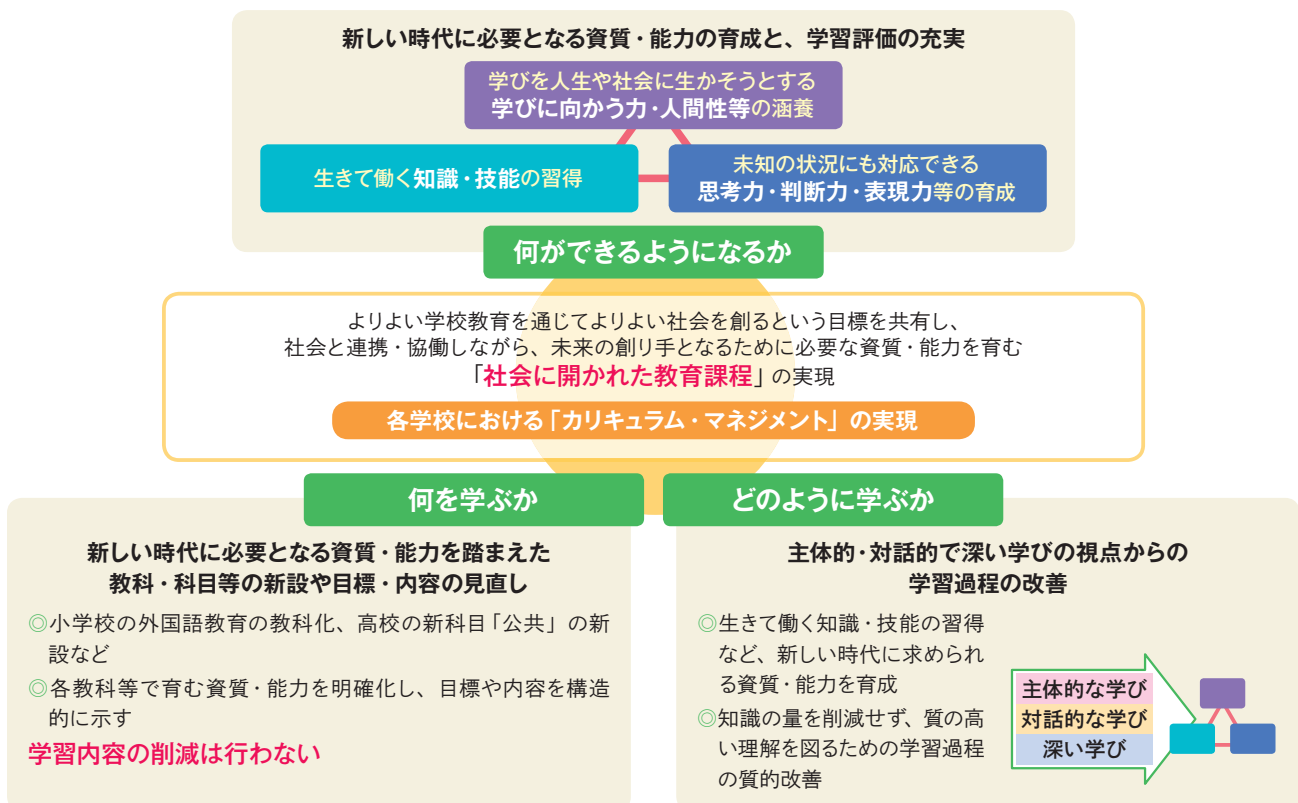
### ① 学校教育目標

「学校教育デザイン」の最も重要な要素であり、学校教育目標の策定こそが、「学校教育デザイン」構築の第一歩となる。自校の生徒に、どのような資質・能力を育むのかを明確化することが求められる（詳細は、P.8～9）。

### ② カリキュラム（教育課程）・指導計画

一般的に、各学年でどのような教科・科目をそれぞれ何単位で履修させるのかを表形式で示したものがカリキュラム（教育課程）である。これからは、「何を学ぶか」だけではなく、それを学ぶことで「何ができるようになるか」、すなわち、「自校で育成を目指す資質・能力」＝「学校教育目標」とのつながりを明確化したカリキュラム（教育課程）が求めら

図2 学習指導要領改訂の方向性



\*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を基に編集部で作成

図3 高校および大学入試にかかわる教育動向



れる。そして、カリキュラム(教育課程)に基づき、教師がいつ、誰に、何のために、どのような指導をどのように行うのかを示した指導計画を策定するのが、「学校教育デザイン」の第2ステップとなる。

**3 授業・指導実践**

カリキュラム(教育課程)・指導計画に基づいて、教科の授業を始めとする各教育活動を実践することとなる。その時に求められるのが、各教育活動の目標(資質・能力の育成)を達成するための「主体的・対話的で深い学び」だ。単元や題材のましまりの中でそれを実現できるように、これまでの実践の蓄積を生かして授業計画を立てることが重要となる。

**現場の声**

◎どのような問いを設定すれば、どのような資質・能力が育つのかを考えることが大切。

**4 評価・検証**

各教育活動の目標がどの程度達成できたのか、校内でしっかりと振り返り、評価・検証して初めて次なる改善へとつながる。そのためには、誰が、いつ、何を、どのような方法で評価・検証するのかを明確化し、実践することが必要となる。

**現場の声**

◎生徒が自分の変容に気づけるような、自己評価の場面を設定する必要がある。自己評価が習慣化できれば、自分でより深い問いかけが可能になる。

◎評価するための材料(レポート、態度、小テストなど)を整理することが求められる。

◎目標準拠型評価の指標を作成し、生徒と教師で共有することが必要。

**5 授業・指導改善**

振り返り・評価をした結果を今後の授業・指導につなげることが、「学校教育デザイン」の一連のサイクルの最終ステップとなる。最終ステップとは言っても、ここで終わりではなく、再び学校教育目標や指導計画に立ち返り、時には目標や計画自体の見直しも図るなど、このサイクルを絶えず回すことが肝要である。

**現場の声**

◎一度決めた目標・計画にこだわりすぎず、トライアル&エラーで改善を積み重ねることが大事。

◎年度途中であっても小さい修正を容認することが重要。そして、小さい振り返りをどうやっていくかで、うまく進むかが決まる。

## 学校全体で回す 学校づくりのサイクル

以上の①～⑤の「学校教育デザイン」のサイクルを回していく上で求められるのが、「カリキュラム・マネジメント」の視点である。「答申」では、カリキュラム・マネジメントには、次の3つの側面があると説明されている。

(1) 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。

(2) 教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。

(3) 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

「学校教育デザイン」における①～⑤のサイクルが、まさに右記の(2)である。そして、(1)、(3)を踏まえて①～⑤のサイクルを確立

し、回すことによって「学校教育デザイン」は完成する。すなわち、学校教育目標を達成するために、必要に応じて教科の枠を超えて教科間・教師間で学習内容や指導における連携をしたり、地域や保護者等の外部資源を活用したりしながら、①～⑤のサイクルを確立し、回すことが求められる。

### 現場の声

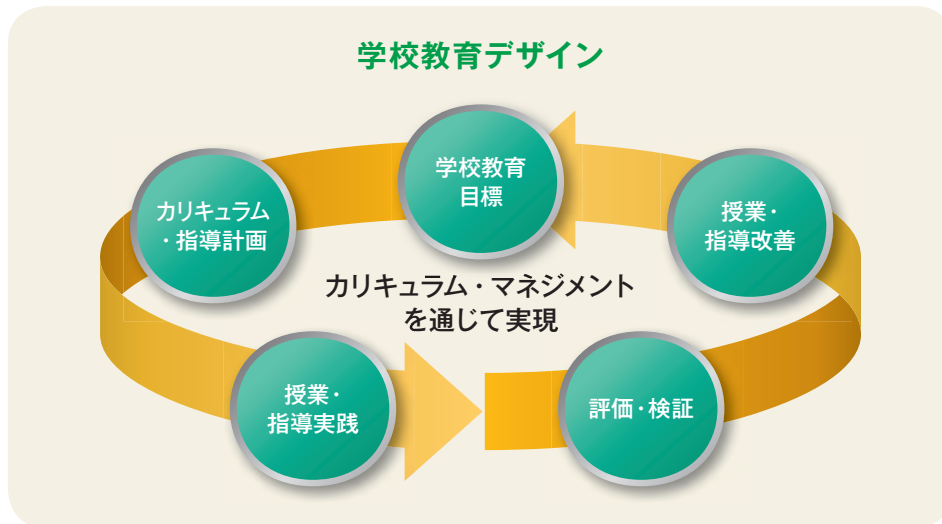
◎単に、異なる教科を融合した授業をすればよいということではない。教科の枠を超えて、社会に出てから役立つ能力を育成することが必要。

◎同じ教育目標を達成するわけなので、教科横断の問いの開発も求められるのではないか。

\*

次ページより、「学校教育デザイン」の第1ステップである学校教育目標について、各校の現状を踏まえて今後のあり方を考えていく。また、これから求められる視点で学校教育目標を策定し、それを学校全体でしっかりと共有して、日々の指導の改善につなげている2校の事例を基に、学校教育目標の策定とその共有・浸透の具体的なポイントも示していく。

図4 学校教育デザインと弊誌・特集テーマ



2017年『VIEW21』高校版・特集・年間テーマ「2020年度・22年度に向けて『学校教育デザイン』を描く」

月号	4月号	6月号	8月号	10月号	12月号
特集テーマ	「学校教育デザイン」の基盤となる次期学習指導要領の方向性を、答申から読み解く	今後求められる「学校教育デザイン」とその実現の第一歩である学校教育目標のあり方を考える	学校教育目標達成のための教育活動全体のカリキュラムと指導計画のあり方を考える	目指す資質・能力を育むための各教科等における授業改善と評価のあり方を考える	実践事例から「学校教育デザイン」の実現のポイントを考える